

## ニンゲンノキホンコウゾウ : ウシロムキノカタチ

上田, 富美子  
九州大学医療技術短期大学部一般教育

<https://doi.org/10.15017/170>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 14, pp. 55-60, 1987-02-28. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン :  
権利関係 :



# 人間の基本構造

— 後向きのかたち —

上 田 富美子\*

La structure fondamentale de l'être humain selon la figure qui tourne le dos

Fumiko Ueda

「人間」とは何であろうか。この問いに答えることは、そもそも論理的に不可能である。なぜなら私たちが自らを超え出ることができない以上、それを包摂し完全な解明へともたらず鍵は、私たちに委ねられてはいないからである。それはつねに私たちの外に置かれ、究極への到達は私たちにとははじめから阻まれている。

にもかかわらず、私たちは自らを問わずにはいられない。してみるとそれは、私たちの構造深くに身を潜める無限の渇きなのか。

## 1

古い神話や物語に登場する原初の人間たちには、一つの共通したかたちが見出せるように思える。それは「後向き」のかたちであり、さらには「背き」のかたちである<sup>(1)</sup>。この背を向けた人びとが洋の東西を問わず、「人間」の原型として提示されているとすれば、「人間」と他のものたちとを区切る一点は、まさにそこにこそ置かれていると見るべきであろう。

彼等はみな一様に、自分を超えた何か「大きな力」に抗して後を向いてしまっている。それは私たちがほかならぬ「人間」であるためには、「人間」という特異な構造をもった存在であるためには、何としても、何ものかに「背を向ける」必要があったということであろう。それがとりも直さず「人間」であるための不可欠の条件を構成しているということではあるまいか。

ではその「背き」の対象となったものは、一たい何なのか。それはさきに見たように、自らを超え出たある「大きな力」であった。それは一般に「神」と言われるものにも相当し、人間を含めてこの世界を成立せしめた根源的な何かを表徴するものであろう。言葉を換えれば、このものは万物の母なる「自然」と密接不可分なつながりをもつとすることができよう。

したがって人間の「人間」としての出発は、「自然」への離反を以てしるしづけられるということになる。だが、自らがそこから生れ出、そこに依拠することでその生存を維持しうるものを現実に断ち切ることは到底不可能である。「生存」こそすべての条件であり、「生命」の根としての「自然」を抜きにして私たちの「存在」はありえない。してみるとこの「離反」には、すでにして一つの仕掛けが組み込まれていることになりはしないだろうか。いやむしろ、「離反」こそが一つの「仕掛け」そのものであると言った方が適切であるかもしれない。

そしてこの「仕掛け」の主役こそ、「意志」と呼ばれ「知」とも称されるものに違いない。<sup>(2)</sup>すなわちこれらのものは現実には「自然」につながれている「人間」を、別の次元へと導くことによって、「離反」を可能にする一つの巧妙な装置であったとすることができる。実際このようなやり方によるよりほかに、すなわち異次元への飛翔によるよりほかに、一方では「自然」のもとにつながれつつ、他方ではそれに背くという「矛盾」を逃れる方法はなかったであろう。

\*九州大学医療技術短期大学部一般教育

こうして私たちは、普通には両立しがたい二つの世界を同時に保有するものとなった。もっともこれらはそれ自身に視点を当てる限り矛盾ではないとしても、一個の「実存」である私たちに同時にかけられるとなると話は別である。ここに一つのゆゆしい問題が提起されることになるであろう。「本能」と「意志ないし知」との対立がそれである。

ところで「自然」に「背を向ける」という行為は、何かもっと積極的な意味をもってはいないだろうか。「自然」に「背く」ということは、言葉を換えれば自身をそこから切り離すということでもある。してみると、ここにはすでに「自然」対「自己」という二分関係が、ないしは二項対立関係が下敷きされているように見える。すなわち「人間」の側にすでに「自覚(自意識)」が成立していたからこそ、「自然」からの離反が可能になったと言うこともできるであろう。

実際、「自意識」は「事柄」への直接的かかわりからの「屈曲」であり、一つの「断絶」のすがたを表わしていると言うことができる。してみると、今まで述べてきたことはすべてこの一点へ向って収束する。すなわち「背き」と言い「異次元」と言うも、あるいは「仕掛け」と言い「知・意志」と言うも、みなこのものの変様であり、別名にすぎないと見ることができるであろう。そして「自己」と言い、「人間」と言うも同様である。そのものはすべての究極のかたちを示している。

こうして「自然」に背いた私たちは、「自意識」の導きにより、おのずから新たな領野(これをさきには「異次元」と呼んだのであるが)へと誘なわれるが、これこそは純粋な「意識」の領域であり、完全に「人間」だけに属する世界であろう。だがこの「世界」の光景たるやアダムとイヴが接した不毛の地のごとくに、目ぼしいものとして何一つない「空無」である。私たちはそれをまた、「自由」とも呼びならわすのだが。しかしながら、この「世界」が「空白」であるのはある意味で当然のことであるに違いない。なぜならそれは「背き」ないし「離反」

をその発端とするが、これらはいずれも一連のつながりを断ちそこに「空白」を置く行為にほかならず、ありとあらゆる「内容」は「自然」の側に取り残されたままなのであるから。

## 2

「自然」は実際確固として存在している。それは「生命」の根として「人間」のもとを離れることはできない。しかるに私たちは「自然」に背を向け、結果として「意識」の空白のスクリーンだけを手もとに残すこととはなった。ではそこでは一たいどのような事態が生ずるのか。暗闇の中で目を凝らすと、定まらぬ影像が飛びかいはじめるように、そこにもやがて何ものかの影が映し出されるであろう。それは自らの背後にあるもの、すなわち「自然」の影像にほかなるまい<sup>(4)</sup>。実際「意識」自身は「空無」であり、その「内容」はすべて他に、「自然」に負わなければならないのだから。こうして「自然」はふたたび「人間」のもとに取り戻されるが、当然のことにそれはもとのままのすがたではありえない。それはすでに「意識」の透過を経て変形され、観念化された「自然」であろう。こうして「自然」は「人間」のもとにあってはつねに「意識」の記号に読み換えられ、「観念」としてしか存在しないし、またそれこそが私たちにとっての「自然」であると言うことができる。しかしなぜ「人間」は「自然」に対し、このように屈折した複雑なかかわり方をしなければならないのだろうか。そこには一たいどんな意味が隠されているのだろうか。

この点について考察するに当たっては、あの「空白」ということが何らかの手がかりを与えてくれるように見える。ところでさきに触れたように、こうした事態が生ずるためには、すでに「自然」対「自己(人間)」の二項対立関係が下敷きにされていなければならなかった。その上でそこに出現した「空無」は、「自己」の目の前には何もないということを示していると言える。そして「自己」に先立つものがないということは、とりも直さず両者の関係において「自己(人

上 田 富美子

間)」の側に完全な優位が置かれたことを意味する。そのように見るかぎり、「空無」は実に大きな意味をもっていたと言わなければならぬ。したがって上に見た「自然」がふたたび「人間」のもとに取り戻され、「意識」の記号に読み換えられるといったことも、すべてこのようなかたちのもとにおいてのことであり、それを抜きにしては考えられないということでもあろう。

さてこのような「自己(人間)」の側の「自然」に対する優先が、どのような事態を招来するかはおのずから明らかである。そこに浮上するのは「人間」の「自然」に対する「支配」の構図であるに違いない。「人間」の言葉に読み換えられ「意識」の中で観念化された「自然」とは、すでに「支配」の「対象」へと変換されたそれを意味するであろう。こうして「自然」はただのもの言わぬ「素材」と化し、「人間」の側の働きかけをひたすらに待ちもつる存在となる。「知」と「意志」とはそれらを活性化し、そこではじめて「自然」は「意味」と「価値」とを付与される。そしてこの公平を欠いた両者の関係は、「主客関係」としてことごとくに私たちのものの見方を規定づけ、「人間」であることの枠組みを構成する。

## 3

さて以上を通じ明らかになったことは、「自然」に背を向けた「人間」の在り方の帰着するところは結局自然支配であったということであろう。これはある意味ではじめから予定されていたこととも言える。なぜなら「支配」ということ自体、「背き」や「離反」を前提しなくては成り立たない行為だからである。そこにはすでに一つの対立関係が置かれている必要がある。だがこれらすべての前提となっているものに、「自然」と「人間」との現実的なつながりがある。実際これなくしては「背き」も成立しえなかったであろう。そしてたとえ背を向けたとてこのものは消滅したわけではなく、依然として存在し続けていることに変わりはない。「支配」はしたがって、「自然」に背を向けたままのか

たちの中でその人間化を通じて行われるほかないが、その背後には絶えず実在の「自然」の影が随伴することになる。なぜなら観念化された「自然」は、しょせん実在の「自然」の写しにほかならないからである。こうして「自然」のすがたは、アンビヴァレントな「人間」の在り方そのままにつねにぶれており、しかとした影像を結ばない。

ではこうした状況をうけての自然支配はどんな在り方を示すことになるのだろうか。「自然」に背を向けたかたちの中での、観念を通してのその「支配」ははじめから実在の「自然」への、「自然そのもの」への到達を阻まれている。したがって私たちに唯一許される方法としての観念化を介する自然支配は、終局をもたないことになる。それは「無限」に続くほかはない。こうして「無限」はよくも悪くも「人間」に必然的な標識となる<sup>(5)</sup>。私たちを取り巻くすべてのものは「無限」の様相を呈する。私たちはつねに途上にあり、それは前向きのイメージとして絶えざる「進歩」、「発展」、「向上」へとつながってもゆく。それは「人間」の最も好むかたちであり、あくなき「冒険」や「挑戦」もまた私たちにつきものの現象となる。可能的存在としての人間規定は、まさにこのような在り方に即応するものと言うことができよう。だがその時私たちはこの限りない前進への励ましを、実は背後に残した「自然そのもの」に負っていることに気付こうとしない。なぜならそれは私たちの「意識」の中では、ただ「支配」の対象としてのみ設定されているにすぎないのであるから。しかしながら実際は、そこへと届きえないにもかかわらず他方においては厳然とそこにつながれていればこそ、私たちは倦きることなく奮い立ち希望をもってそこへと向おうとするのではあるまいか。私たちは限りない「挑戦」へのエネルギーを、すでにそこから汲んでいるということができよう。

だが「無限」への上昇が、無限の下降へと転落するのにさほどの時間は要さない。なぜなら私たちは「自然そのもの」に接近することなく、

代りにその「観念」を入手し続けるばかりだからである。そこにはつねに同じ「人間」のしるしがつけられ、その刻印を逃れることは私たちには不可能である。「挑戦」の結果は報われることなく、そこにはただ限りない「徒労」のみが積み重ねられてゆく<sup>(6)</sup>。こうして「疎外」もまた私たちの在り方に必然的に随伴し、この逼塞の状況からの脱出の切実な願望と、囚われの現実への不可抗的な無力感とが「迷路」のイメージとなって私たちをおびやかす<sup>(7)</sup>。だが私たちはいつまでもそこにとどまり続けてはいないだろう。不明な「自然」の巨大な力にまたもや鼓舞されて、再び立ちあがり新たな挑戦へと踏み出してゆくに違いない。こうして私たちは自然像のぶれそのままに、「絶望」と「高揚」との間を絶え間なく行き戻りし安らういとまをもちえない。

しかしここで念頭に置かれねばならないのは、それらすべてが自閉空間の中のただの独り遊びにとどまらないということだ。「意識」の中での観念操作としての自然支配は、単にその内部での出来事に終始しうるものではない。なぜならさきにも述べたように、「自然」は本来私たちの外に出ているからである。私たちがそれを自らの内に囲い込もうとどうしようと、「自然そのもの」は依然としてその外に厳然と存在する。したがって観念操作は当然実在の「自然」にも及ぶであろう。物言わぬ「質料」と化した「自然」は、「観念」をモデルとした改変に無防備にさらされる。「自然」を「人間」の言葉に読み換えるとは、まさにそうした事態を指すのに相違ない。

こうして私たちはありのままの「自然」とは似ても似つかぬ人間化された「自然」のかたち、すなわち「文化」に圍繞される次第とはなる。だがさきに見たように「自然」の読み換えに限界は設けられていないのだから、当然その改変にも終局はありえない。それは「自然」の側から言えば、すなわちその無限破壊にほかならないであろう。手つかずの「自然」が時の流れとともに消滅してゆくのは、「人間」の基本的在

り方そのものにこそ由来する。だが「破壊」の脅威にさらされるのは、何も私たちの外なる「自然」だけに限られはすまい。私たちは一方においてその根を「自然」の内ぶところ深くにおろしているのであるから、私たちの内なる「自然」と同様である。こうして「自然」の人間化は、私たちの「生命」自体をその代価として要求する。「主体」と「客体」、「支配」と「被支配」の関係はそのまま自身の中に持ち越され、「自己」は二つに引き裂かれ、「支配」の徹底は直ちに自らの「生命」の涸渇を招来する結果となる。「人間」に本来的な「矛盾」はここに極限的なかたちで以て示されざるをえない。

その一例を私たちの中の「自然」の代表たる「本能」に求めてみれば、それは身近であるだけ—そう私たちの「支配」を免れがたく、人間化のしるしである「無限」を刻印されることにより、それが本来所有するはずの自然的調整機能を失い、果てのない「欲望」へと転化するであろう。こうして私たちは自らの中の「自然」を操作してまで、「自然」を追いつめ自身をもまた追いつめてゆく。

## 4

さて以上を通じて明らかになったことは、「人間」が本来的に抱える「矛盾」であろう。それは長い人類の歴史の果てにようやくもたらされたといった類の、特殊な現象では決してありえない。それは「人間」の構造自体が当初から持ち合わせていたものの当然の帰結でもある。実際私たちは一方において「自然」とのつながりを保持しつつ、他方においてそれに背を向け、「自己」の優先を確保してそれと対峙するかたちを取った。こうして、「連続・調和」、「分離・対立」が同時に私たちにかけてくる次第とはなる。そして自己自身は引き裂かれ二分されるが、私たちの「意識」内にあるのはあくまで後者であり、前者はその外にとどまる。したがって「意識」内での「自己」と「自然」との対立関係は（しかもそこでは「自己」の側に絶対的優先権が委ねられているのであるから）、

上 田 富美子

「自己」によるすなわち「人間」による自然支配というかたちを取らざるをえないが、それはまた同時に私たちがそこへとつながれている「自然そのもの」へは決して届きえないことをも意味している。なぜなら「対立」ということ自身両者の究極的不一致を前提としているのであるから。こうして私たちはその代りに「無限」を手渡され、いたるところにそのしるしを見ることになる。それは取りも直さず真の「支配」の不可能を意味し、その挫折を示すものであろう。だが一方現実的な「自然」との連続性は、こうした自然支配を単に「意識」内のことにとどめず、実際の影響を生ぜしめずにはいないのであるが、それは「対立」と「支配」の構図そのままに一方的な自然改変、さらには自然破壊へとつながってゆく。しかもこのような在り方はそのもの自体としては「意識」内のこととして、現実の「自然」と完全に切り離されてもいるのであるから、この「破壊」への傾向は何らの歯止めをもっていない。それはそれ自身のメカニズムにのっとなって、いともやすやすと成しとげられるであろう。だがこの構造の中で「支配」の対象とされたのは、同時に私たち自身ではなかったのか。なぜなら私たちは一方で「自然」と深く結ばれ、それと一体化してもいたのであるから。「自然」という名は同時に「人間」をも表明している。結局私たちは自らと対立し、それを支配し、その拠って立つ基盤を破壊へとさらしてゆく。「人間」の「矛盾」はここに極まると言うことができるであろう。

ではこの「矛盾」をもたらす決定的一点となったものは何か。言うまでもなく、それは「自然」に背を向けた「人間」の姿勢である。その姿勢は「自己」をも「自然」をも封印したかたちとなり、その瞬間両者は了解不可能な「対立物」へと変容する。では私たちに「背反」の姿勢を取らせたものは何なのか。それはさきにも述べたように、「自然」に対する「自己」の「先立」ないし「優先」であろう。そしてそこには何の正当な理由づけも設けられてはいず、それはただ無前提的と言うよりほかはない。ところで「自

己」の側の無前提的な先立ということは、言葉を換えれば自己中心的ということであり、私たちはそこに「エゴ」のすがたを透見しないわけにはゆかない。したがって「人間」に本来的な「矛盾」をもたらしたものは究極的には「エゴ」であり、しかも類的なそれであると言うことができる。それは私たちすべてに共有のかたちであるがゆえに、容易にそれと見破らしめない構造をもっている。しかしそれは「人間」の内実深くに喰い込み、ありとあらゆる人間的特性を構成する。例えばその意味で「論理」も自己弁護の様相を免れえず、そこに生ずるアポリアやトートロジーはそれ自身の限界を明示し、究極に現われる「同一律」はこうした在り方の写しにすぎないであろう。理由のない自己肯定からはじまる主観的枠組みの中で、真の「客観」を模索すること自体そもそも無理であったと言うべきであろう。

そこには、「真実」と「虚偽」とを分ける確たる規準ははじめから設けられていない。人生は一場の「芝居」か「夢幻」と化し、こうして「遊び」も極めて人間的な特性となる。高揚と失墜とは絶え間なく交代し、「価値」は引き裂かれ、すべては目まぐるしく変貌して定まったすがたを見せない。「孤独」と「不安」、「猜疑」と「不信」は終始私たちに付随し、この複雑で定めない状況は、その閉鎖性と相俟って、私たちが「人間」特有の病いの中へと追い込めないではおかない。

さて以上よりして私たちにかけられる究極の課題は、「エゴ」の克服ということに尽きることになるだろう。これこそが自身の「生命」の根源を守り、それは直ちに「自然」の尊重へとつながってゆく。そこでこそ私たちはまた「分裂」の病いから癒やされ、自・他合一の「真理」と真の「客観」のもとへと導かれるに違いない。そこに至る道が容易でないことは、無論言うまでもない。しかし私たちは何よりもまずここで原初へと立ち帰って考えてみる必要があるのではあるまいか。「自然」と連続した在り方こそがそこでは第一義的なことであり、それへの「背

反」はしょせん第二義的なことにすぎなかった。さらに言えば、後者は前者を受けてはじめてその成立を許され、それなくしてはその存立さえも危ぶまれるものである。そして実際、すでに見たように、私たちは「自然」に背いた在り方の中においてすら、「自然そのもの」をひそかに目標とし、そこから無限の「挑戦」へのエネルギーを得ていたのではなかったか。その力の倦くことのない更新は、「生命」の源泉としての「自然」にこそ委ねられていたのではなかったか。ここではたとえ無意識のうちにおいてであれ、そのような本来的「自然」がすでに前もって肯定されていたとも言える。「意識」内では自然支配の構図として受け取られていたものが、こうして逆に実際は「自然」の主導のもとに置かれていたことが明らかとなる。私たちは届きえない「自然」に無限の憧れを抱き、そこへの到達を、それとの完全な一致を本当は目指していたのだと見なすことができる。「自然」への「離反」は、実はそこへの「還帰」の第一歩にすぎなかったのだ。このことは私たちを大いに力づけてくれるに違いない。なぜならたしかに「自然」への背きが私たちを「人間」として「人類」として規定づける大きなしるしであったにしても、それを抱き取る揺るぎない「真実」があることを、いまは疑いを容れないたしかさで知ることができるからである。

— たい何ものが私たち「人間」に、他に類を見ないこのような特異な在り方を取らしめたのであろうか。それは一たん私たちのものとなった上からは、私たちの「知」と「意志」のもとに委ねられはするが、そのような在り方自体は私たち自身が選び取ったものでは決してない。たしかにそれは私たちの「弱さ」をカバーす

る「庇護膜」として機能し、私たちを直接的に「自然」の脅威にさらすことなく、私たちの「種」の保存に役立ちえているのかもしれない。しかし、この装置はそれ以上のものを余りに含みすぎている。私たちにそれを委ねたものは私たちを試練にかけ、自らの力でその在り方を逆転することを望んだのでもあろうか。だとしたら、そこまでの力をこのものは私たちに与えてくれているに相違ない。

### 〔註〕

- (1) 「創世記 第3章」アダムとイヴの話、「ギリシア神話」プロメテウスの話、「古事記 上巻」黄泉の国におけるイザナギの話など参照
- (2) 「背くこと」は意志的行為であり、意志的行為は知的判断なくしてはありえない。「知」と「意志」とはほとんど一体のものと見なければならぬ。
- (3) 「創世記」第3章 17～18 参照
- (4) これらのことは、プラトンのあの有名な「洞窟の比喩」を思い起させるが、このように見る限り、それは「人間」というものに対する深い根源的洞察を含むものと言わざるをえない。  
(プラトン「国家」第7巻参照)
- (5) 短大紀要 第11号「『理性』と『関係』」参照
- (6) その代表例として冥府におけるシーシュポスの苦役を挙げることができる。（「ギリシア神話」参照）
- (7) その原初的なかたちの一つは、ミーノータウロス（牛人）が閉じ込められていたクレーテー島の「迷宮」の中に見出せるであろう。（「ギリシア神話」参照）